

「小菊生産への情熱」 株式会社徳網建設（出石町中村）

徳網建設アグリ事業部に所属する平山元基さん（49才）は、入社されて8年になります。

以前、運送業に従事されていた頃、但馬各地に農業資材・肥料農薬・水稻苗の配達をされたこともあり、地元の農業事情を熟知され、また生き物を自分で育てて結果を出すという農業にはずっと関心を持たれていました。折りしも徳網建設の求人募集を知り、すぐに面接を受け採用されました。80アールの圃場では、ビニールハウス4棟を含め、露地との組合わせで周年出荷されています。小菊・ストック・スプレー菊・新鉄砲百合を栽培され、主な出荷先は「姫路生花市場」、「たじまんま」です。消費者の生の声を聞けるという点では「たじまんま」への出荷が期待できます。花を陳列している時、お客様の声が耳に入りました。「先日買った徳網さんの小菊、長持ちしたわぁ！」思わず「よっしゃあ！」とガッツポーズするほど嬉しかったそうです。

主力の小菊については、光中断（夜間に5時間LED遠赤色光照射）という手法で、本来7月に開花するところ、盆前に照準を合わせて出荷されるそうです。「開花の時期の調節には降雨・気温という気象に左右されながら電照を終了させる時期の決定があり奥深いですね。私なんかまだまだですよ！」と微笑む眼差しの奥には飽くなき探究心が垣間見えました。植物の生長・生育には植物生長ホルモン、気温・日長の関わる花成の機構の関与があるそうです。増々の好奇心で生花の栽培に挑戦してってください。

（農業委員 西沢 泰裕）



アグリ事業部 平山元基さん



光中断のLED設備

「有機栽培で頑張る」 認定新規就農者 立脇収平さん（出石町宮内）

立脇収平さん（29才）は大学卒業後、豊岡市農業スクールで出石町小野のナカツカサファームにて3年間研修され令和元年に就農されました。出石町水上の長年遊休農地だったところを借り受け整地され、現在はビニールハウス5棟（50m）と畑を1ヘクタール経営されています。ビニールハウスはネギや小松菜、ほうれん草などを周年で栽培され、露地野菜では、ピーマン（9アール）、ニンジン（40アール）を作られています。

仕事として農業を選ばれたことについて尋ねたところ、中学生の時にトライアルウィークで小野のナカツカサファームで農業体験され、その後、度々アルバイトに行くようになり、有機農業の素晴らしさを知ったそうです。大学を卒業し就職活動を始めたときに、中務さん（現 農地利用最適化推進委員）に今後について相談され、話をする中で農業へ進むことを決められました。

栽培スタイルは有機栽培にこだわり、有機JASの認証も取得され、学校給食センターやイオンまたコープ自然派へ出荷され、安全安心な野菜として、消費者に喜ばれています。最近是人参のジュースも作られており、将来は増産していきたいとのこと。

農業の仲間としては、豊岡オーガニックワークスとJAたじま青壮年部に所属され、若い力で豊岡の農業を盛り上げておられます。新規就農3年目で今の経営ができていて自信が付き、規模拡大や、将来は法人化も目指して行きたいと話しておられました。

（農業委員 仲川 弘之）



立脇収平さん



有機農業を継承

奈佐地区 （豊岡地域）



奈佐地区は谷幅が狭いため、圃場は小さく、経営規模も小さいながらも水稻を中心に耕作されています。

事着手しています。圃場の大型化により作業



内町地区下流（北側）からの耕地風景（ドローン撮影）

いわゆる「山田」も多く、山間の奥地まで農地が開墾されており、昔の人々の開拓精神には感心させられます。その山田も耕作放棄が進みほとんどが作付けされなくなり一部は山林化しています。

効率の向上と給排水を自然庄のパイプラインにすることで開放水路を無くし、草刈り作業の機械化・省力化を図ります。さらに法人化した営農組織により持続可能な農業経営を目指していこうとしています。

各集落で農会長や区長を中心に「守るべき農地」を設定し、その中から遊休農地を増やさないと

し、皆で知恵を出し合い営農しております。行政からの更なる助成支援にも期待するところです。

今後持続可能な農業経営が出来るよう、関係機関等の皆様のご協力を得ながら、農地利用の最適化の推進の手助けをしていければと考えています。

（推進委員 石原 章二）



石原推進委員



森田農業委員

西気地区 （日高地域）



西気地区は日高地域の西部に位置し、標高300m～370mの盆地に7区約700人が暮らしています。耕地面積は約162ヘクタール、田のほとんどが圃場整備されており、高原性の気候や水にも恵まれ、良質な米が穫れます。昭和の時代には高原野菜の栽培・出荷も盛んでした。またスキー産業の発展と共に四季型観光化が進み、多くの民宿が宿泊者に提供する米や野菜を自家栽培し、耕地は農作物でいっぱいでした。

しかし現在は多分に漏れず、遊休農地が増えつつあります。その要因の1つ目は「少子高齢化等による耕作者の減少」、2つ目は「安い米価」、3つ目は「機械にお金が掛かり過ぎるなどの膨らむ生産コスト」だと思っています。これらに加え、宿泊者の減少や民宿の廃業などによ



神鍋山噴火口から西気耕地を望む

り農作物を沢山作る必要がなく、なったことによる農業規模の縮小も当地域特有の大きな要因です。このような状況の中、私は「農地は農業委員と農地利用最適化推進委員だけでは守れない」と感じ、専ら、各区の農会長と情報共有し、農会長に「農地を荒らさないように動いて下さい」とお願いするのが活動の主体となっています。また、各区長にも「農地の課題Ⅱ地区の課題」として理解して頂き、各区での補助事業の活用や研究も進んでいます。今後はさらに区長や農会長、担い手、コミュニティ組織等との連携を強め、微力ながら「西気地区の農地を守るお手伝い」ができればと思っています。

（推進委員 和藤 達也）



和藤推進委員



原農業委員



田植え後の水面に映る「逆さ神鍋山」